様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３５３０９
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１３１０７

研究課題名（和文）生きていることの有意味感を見据えたソーシャルワークの枠組み研究

研究課題名（英文）Sense of the Significance of Being Alive:Building Social Work Frameworks informed by Survival Narrativees

研究代表者
熊谷　忠和（KUMAGAI, Tadakazu）

川崎医療福祉大学・医療福祉学部・教授

研究者番号：３０３４１６５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，ライフ・ストーリー・インタビューを通して，日本以外のハンセン病当事者やハンセン病以外のHIV当事者，アルコール依存当事者にあっても，スティグマにさらされる状況にあり，それらの当事者がその状況を受け入れていく過程にどのような心理社会的要因があるのかを検証するものであった．結果として，スティグマを抱えた当事者は自己の苦悩を乗り超えて，より深い人生の意義を発見していき「生きていることの有意味感」境地に至ること，そして「生きていることの有意味感」形成過程でのナラティブのダイナミクスが明らかとなり，社会構築主義を基盤にしたソーシャルワークの枠組みの提起が検証される結果となった．

研究成果の概要（英文）：This research aims to map the social and psychological factors that aid individuals living with stigmatized conditions such as Hansen’s disease, HIV and alcoholism.The researcher posits the notion of ‘transcendental Narrative’ in which individuals discover a deeper meaning in life through their experiences that enables them to transcend their suffering.Whether individuals reach this form of narrative and,if so,the factors that enable this process of self-redefinition are the focus of this research. Hansen’s disease,HIV and alcoholism have been chosen for this research as they are conditions that have been stigmatized.The researcher hope to use this mapping to help service users create a strengths model of self based on their cultural and personal resources.In doing so,it is hoped the social worker and service user can find a pathway towards self-acceptance and redefinition.

研究分野：社会福祉学

キーワード：ソーシャルワーク　ライフストーリー　生きていることの有意味感　スティグマ

１．研究開始当初の背景

本研究の目的は，これまでの申請者の研究「生きていることの有意味感を見据えたソーシャルワーク援助枠組み研究」（熊谷 2012）を，さらに当事者のライフ・ストーリー分析を多文化視点も加えつつ検証することである．わが国において，本研究と類似の研究，すなわち社会構築主義的思考に基づくソーシャルワーク研究は，1990 年以降，1980 年代のソーシャルワークの中心的な理論的位置を占めてきたシステム思考に替わる新しい考え方として登場してきている（野口 1995：180，松端 1997：268，狭間 1999：77，松倉 2001：224，田垣 2001：110，木原 2002：286，奥田 2004：3）．しかしながら奥田論文以降では，直接的に社会構築主義的思考かつソーシャルワークを論じるものは少ない．そのような背景の中で，申請者の援助枠組み提起（熊谷 2012）（図１）は，社会構築主義的思考に拠って立つソーシャルワーク援助の目的概念，体系化，すなわちその基盤とする理論・方法の枠組み構築について一定の意義があったと考える．なお申請者はこの援助枠組み提起にあたり「医療福祉学に基づく健康格差に関する研究(1)」川崎医療福祉学会誌 17(2)，2008.「医療福祉学に基づく健康格差に関する研究(2)」川崎医療福祉学会誌 18(2)，2009.「社会構築主義の理論的潮流の再整理の試み」川崎医療福祉学会誌 20(2)，2011. を積み重ねてきている．

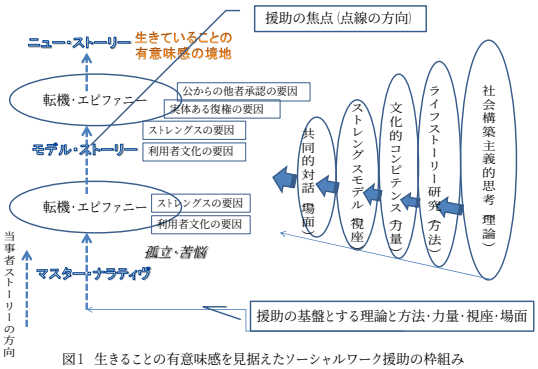

図1　生きることの有意味感を見据えたソーシャルワーク援助の枠組み

２．研究の目的

本研究の目的は，これまでの申請者(熊谷)の研究である社会構築主義的思考に基づくソーシャルワーク援助の理論・方法の枠組み構築を目指した「生きていることの有意味感を見据えたソーシャルワーク援助枠組みについての研究」（熊谷 2012：最新社会福祉学研究，7，1-14.）を踏まえ，さらに多領域（ハンセン病，エイズ，アルコール依存症など）当事者のライフ・ストーリー分析を多文化視点も加え，すでに申請者が提示している「生きていることの有意味感を見据えたソーシャルワーク援助枠組み」（図１）の妥当性，実践性を検証することである．

３．研究の方法

本研究の目的は，これまでの申請者の研究「生きていることの有意味感を見据えたソーシャルワーク援助枠組み研究」（熊谷 2012）を基盤に，多領域（ハンセン病，エイズ，アルコール依存症など）当事者のライフストーリー分析を多文化の視点も加えつつ，その枠組み（図１）の妥当性，実践性を検証することである．ついては申請者がこれまで協力関係を構築してきた海外の研究者とも共同して，多領域，多文化の当事者への「人生に関するアンケート調査」及び聞き取り調査を実施することを基本とし，1)関連資料・文献の収集と精査，2)所属大学の倫理審査委員会に申請する，3)海外共同研究者とこれまでの研究成果と課題を共通認識とし，本研究の目的や進め方を確認する，4)「人生に関するアンケート調査」の質問項目，また聞き取り調査の手順を見直す，5)具体的な調査日程や方法について調整する，6）当事者への「人生に関するアンケート調査」及び聞き取り調査を実施する，7)調査結果について分析し検証を行う，8)検証結果に基づき成果をまとめる．

４．研究成果

（1）本研究について，川崎医療福祉大学倫理審査委員会に申請し承認された（承認番号：15-076）．

（2）本研究に関連する資料・文献の収集をし精査した：スティグマ研究に関する海外文献を中心に多数収集し，分担研究者と読み合わせを頻繁に行った．

（3）分担研究者と頻繁に会合をし，調査の方法や質問項目の精査を行った：特にライフストーリー・インタビューの導入時に活用する質問シートを開発した．

（4）海外の共同研究者と連絡をとり，本研究調査の共通認識を図り，調査日程や方法について調整を行った：拠点大学としたグランドバレイ州立大学のジョーン・ボルスト博士，マレーシア科学技術大学のアズリンダ・アズマン教授，ボーンマス大学のジョナサン・パーカー教授と頻繁にメール等で連絡を取り合い進めた．

（5)米国のグランドバレイ州立大学を拠点として，HIV やアルコール依存症回復者の実態を把握した（平成 28 年 3 月 18 日－27 日）：1）HIV やアルコール依存症からの回復者を取り巻く状況について研究協力者である Borst 教授（GVSU）より詳細説明を受けた．2）Borst 教授の文化的コンピテンス関連の講義に参加し、本研究についての説明を行った．3）現場のソーシャルワーカーとのセッションの機会を 3 回持つことによりアメリカにおけるソーシャルワーカーがどのような援助枠組みを持ち実践に向けて

いるのか把握し、ソーシャルワークの枠組み研究へのつながりが考察できた.
(6)マレーシア科学技術大学を拠点としてハンセン病当事者を取り巻く状況について把握し，スンガイブローセツルメント協会を介し3人の当事者への聞きとり調査を行った（平成29年3月7日－13日）：1）USMにおいてAzlinda教授とソーシャルワークを専門とする教授スタッフとマレーシアにおけるハンセン病を取り巻く状況について情報提供をうけ本研究内容について討議をおこなった. 2）ハンセン病セツルメント周辺にある病院やリハビリ施設、ハンセン病関連の資料館，ギャラリー、民家を徒歩により踏破した. 3）スンゲイブローレプラシーセツルメント協会のJyoce女史を介し3人のハンセン病当事者のインタビューを寺院やそれぞれの自宅にて行った．それぞれのライフ・ストーリーを聞きとることに成功した.
(7) 川崎医療福祉大学を拠点として，アルコール依存回復者の聞きとり調査をおこなった（平成29年12月–平成30年3月).
(8) 英国のボーンマス大学を拠点として，HIV 当事者への聞きとり調査及び関係者ヒアリングを実施した：本渡航では，本研究の一環として，以下の研究調査を行った.
1)スティグマとソーシャルワークにかかわる多数の教員へのインタビューを分担研究者とともに３セッションにわけ行った．それぞれのセッションでは，冒頭に，本研究の概要を説明したあと聞き取り、討議をおこなった. スティグマはHIV,高齢者ケア，難民ケア，メンタルヘルスの領域で存在していること，基本的な関わりとしてはライフ・ストーリー，ナラティブを重視していること，本研究の苦難を乗り越え，打ち勝つプロセスを重視することに高い関心と支持が得られた. 2）HIV当事者へのインタビューを行った．HIV にかかるスティグマがどのようであり，そしてどのように乗り越えてきたかが語られた．それは本研究提起しているライフ・ストーリーのダイナミクスと合致するものであった. 3）イギリス北部に位置するチェスタフィールド市ダービシャー支局Clay Cross社会福祉部ソーシャルワーカーRuth Crawford をコーディネーターとして,社会福祉部でメンタルヘルス,HIV,難民の担当をしているソーシャルワーカーへのヒアリング，２セッションを分担研究者と行った．またそれぞれ本研究についての説明をした上でスティグマとソーシャルワーク関する討議をおこなった．本研究の視点に関心が持たれ、実践の中でもサービス利用者がサービスを受ける存在だけでなく，他の支援者になる時エンパワーがなされることをよく経験するとのことで，本研究との認識は一致した.
(9) 聞きとったライフ・ストーリーの例示
①アルコール依存症回復者Aさん(日本)
Aさん：71歳（1947年生まれ)，男性，日本在住：幼少の頃から，父親が「酒飲み」で,（大人になっても）酒は飲まないでおこうと思っていたという．高校卒業後，家を離れた 21 歳で初めて酒を飲むことになった. 酒というのは「こんなに美味いものか」と思った．結婚後，妻の家族と暮らし始めたが，妻の親も兄弟も酒は嗜まず，いつも二階で一人飲むことが多かったという．28歳の頃には,「身体が酒を欲する」状態となり，仕事上，家庭上，あるいは借金などの経済上の問題も抱えることになる. 32歳には離婚に至る．離婚後はさらに生活は荒れ果てた（「支離滅裂の人生」)．離婚して 6年くらいの頃，娘の「お父さん，このままでは，まだまだ可哀そうな人間になる」との言葉が契機に,復縁することになった(38歳)．復縁して「今度はやるぞ」と生活の立て直しをはかろうとしたが,間もなく,「身体が酒を要求」し「元の木阿弥」であったという．その間，専門病院の入院，断酒会参加の機会も得るが，再飲酒を繰り返していた．しかし，再飲酒が続く中，先輩の励ましや，体験談，あるいは家族の体験談を聞く中で,「自分をふり返る」ことができるようになった．その頃から（45歳）完全断酒が続いている．現在は，Ｉ県の断酒会幹部であり，全断連（全国断酒会連合会）の活動,保健所などの関係機関への提言,小・中・高校での啓発講演，さらに保護司としての更生保護活動等で多忙な毎日を過ごしている.最近「最愛の妻」を亡くした.「なんぼ飲もうとしたかわからない」時期があったが，現在は，一人暮らしで、毎日「感謝の日々をおくっている」としている.
② ハンセン病当事者Bさん（マレーシア）
Bさん：70歳（1948年生まれ)，中華系マレーシア人，女性，マレーシア在住：Bさんは1955年7歳の時にハンセン病を発症した．医師の指示により化膿した右指の手術を受けるため，父親に連れられて，G島にあるXセツルメント(ハンセン病療養所)に入所した．Bさんの父は一週間に１回程度ボートで来てくれていたが,帰るたびに,ボートが見えなくなっても悲しく泣き続けていた．3年間Xセツルメントにいたが,他の子どもたちと喧嘩が絶えず,10歳の時,母親の家に引き取られた．15歳の時，母親の家を飛び出し再びXセツルメントに戻った．その後，政府の方針でXセツルメントが閉鎖されるまでの10年間そこで暮らし,1969年にXセツルメントの317人の入居者とともに同年にYセツルメントに移った.
この間Bさんは仏教に目覚め仏教徒としての活動を始めている．BさんはXセツルメントにいる間，同じ入居者であった夫の間に2人の娘と１人の息子を出産している.
当時のハンセン病者は余程の特殊な命令がない限り子どもと暮らすことはできず，親せきに引き取られるか，社会福祉機関を通

して養子縁組するか福祉施設（団体）に引き取れていった．そしてBさんの3人の子どもたちは社会福祉機関をとおして見知らぬ人に養子として引き取られた．B さんにはその後，子どもの消息は一切知らされることはなかった．Y セツルメントに移ってから，一人の息子を出産したが，夫は，博打に明け暮れ，B さんにお金を入れることはなかったので，Bさんは27歳のとき夫と離婚している．4 人目の息子は夫が連れて行った．Y セツルメントでは，政府の食糧支援やセツルメントの管理者の医療管理体制や営農支援体制の整備により，パパイア農園で自活する入居者も出現し，セツルメントの暮らし向きは改善されていた．B さんも,家庭的には様々な苦悩を抱えつつも，甥と植物育成ハウス経営をしながらYセツルメント居住区で共同生活をしている．また，子どもの消息を追うことの活動を通して，政府への積極的な働きかけや社会活動を展開している．現在では，慈善マーケットで，カラフルな布切れを縫い合わせたキルトの販売活動に忙しい毎日を過ごしている．またカラオケやダンスを楽しむ生活を過ごしている．

③　HIV当事者Cさん（英国）

Cさんは HIV の診断を受けた 51 歳のイギリス人女性である:現在CさんはHIVの人々のための教育サポートセンターの管理をしている。小地域で HIV に関する啓発活動を非常に活発に行い， HIV の現状や予防について話すために，学校や組織に訪問をしている．HIV の診断されたときには，彼女は慈善活動をする若い母親であった.また,ソーシャルワーカーになるためのトレーニングを受けていた．しかしながら、HIV の診断を受けたことはショックであり，C さんの人生の方向を劇的に変えることになった.彼女は人生のドアが閉じられたように感じた．ハイリスクな状況になかった彼女にとり、診断を受けたことは完璧なショックであった．すぐに死んでしまうので，今なら何かできるような感覚となり，彼女の人生で気が狂うような状態になったという.彼女は，自分の人生がコントロールしきれない気がしていた．C さんは家族のリアクションが怖かったので，家族に直に話すことはしなかった．C さんは当時娘と孫と暮らしていた．彼女は，家族を守りたかったので，HIV であることは言わずに，しっかり部屋の鍵を閉めて，歯ブラシやヘアブラシなどの身の回り品を（家族が使わないようにするため）すべて持ち出せないようにした.Cさんは，他の家族に自分の HIV がうつすかもしれないと思うのは，これがセルフ・スティグマの形であると語った．彼女は病気をコントロールすることはできなかったが，食べることのコントロールをすることができた.そして彼女は非常に痩せた.家を出るときであっても，大きい帽子をかぶり人目にあわないようにしていた.それはまさに彼女にとり生き地獄のようであったと語った.1 年後に彼女は家族に話した.彼女の友人はいつもサポーティブであったが，C さんは，非常に否定的でした．彼女の友人，家族，そしてセラピストは、HIV 女性のためのワークショップに行くよう彼女に説得をして勧めた.彼女は多くの HIV 女性がいることがわかったとき，それが彼女にとって大きい転機となった．C さんにとり，先輩メンバーたちは，自信に溢れ，強力に見え，人生を精一杯生きているように見えた．C さんは，グループの先輩メンバーから，新しい人生をコントロールするために，前進すべきであるといわれた．彼女は，家に帰り、SNS でカミングアウトをした．開示することは彼女にとって怖いことではあったが，彼女にとって，重要な一歩であった．そして，C さんは，自助グループに加わることになった．彼女は，この場所が好きになり，より多くの時間を過ごすようになった．彼女の几帳面さ，風通しの良さ，および生まれながらのユーモアのセンスのため，教育の場や公共の場で話すことが多くなった．彼女は現在サポートセンターを運営しながら，小地域で，HIV にともなう人生について話すなど，非常に大きい公共での役割を果たしている．C さんはこのことが自分にとって，生きる目的を与えたと語った.その目的とは,人々が HIV にかかるのを予防し，また人々がこのことをよりオープンに話すことを助けることであるとした．C さんは，病気に関する人々の考えを変えていくこと,そうすることが、HIV のスティグマのいくつかを取ることを助けることになるとした.

（10）本研究のまとめ

本研究は，ライフ・ストーリー・インタビューを通して，日本以外のハンセン病当事者あるいはハンセン病以外（アルコール依存，HIV 当事者）にあっても，スティグマにさらされた状況にあり，その当事者がその状況を受け入れていく過程にどのような心理社会的要因があるのかを検証するものであった．つまりスティグマを抱えた当事者は自己の苦悩を乗り超えて，より深い人生の意義を発見していき「生きていることの有意味感」境地に至ること，そして「生きていることの有意味感」形成過程でのナラティブのダイナミクス（マスター・ナラティブ⇒モデル・ナラティブ⇒ニュー・ストーリー）を明らかにし，社会構築主義を基盤にしたソーシャルワークの枠組み構築（理論・方法・実践）へと結びつけられることが再検証された（**図１**）．また当事者へのソーシャルワーク支援を展開するにつけ，この検証はソーシャルワーク・アセスメントにおいて有用であることも再確認される結果となった.

しかし，この枠組みにおいては被援助者との関係構築，さらにはライフ・ストーリーという長いスパンの関係性の中でのアセスメントが求められることに由因して，短期的な結果が求められるソーシャルワーク支援展開においては援用の限界性が生じることも考えられる．したがって，1）当事者との安定した信頼関係成立の必要，2）「生きていることの有意味感」構造の明確化，3）ライフ・ストーリーの力動的推移の構造分析の必要を今後の研究の課題とした．

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
① 熊谷忠和、「つなぐ」を再考する－ソーシャルワークの実践と研究から－、千葉看護学会会誌、査読なし、vol. 23、No. 2、2018、pp. 37－40
② 直島克樹、Tim Cleminson、熊谷忠和、児童虐待に対するソーシャルワークの国際比較研究－子どもの権利保障とアフターケアの課題と展望－、生存科学、査読有、Vol. 26、No. 2、2017、pp. 167－189
③ Tim Cleminson , Katsuki Naoshima , Tadakazu Kumagai , Overview of Care Leavers and Aftercare Services in Japan : Measures for Extended and Gradual Transitions to Independence. Kawasaki Journal of Medical Welfare. 査読有.Vol. 22, No2, 2017, pp. 89-101
④ 井上信次、熊谷忠和、下田茜、生きていることの有意味感　－ハンセン病当事者のライフストーリー分析から－、川崎医療福祉学会誌、査読有、Vol. 25, No. 2、2016、pp. 301-306

〔学会発表〕（計１件）
① 熊谷忠和、「つなぐ」を再考する－ソーシャルワークの実践と研究から－、千葉看護学会第 23 回学術集会、2017、9 月

〔図書〕（計２件）
① 熊谷忠和 他、晃洋書房、多面的視点からのソーシャルワークを考える－研究と実践をつなぐ新たな整理－、2016、219
② 熊谷忠和 他、みらい、ソーシャルワークの方法とスキル～実践の本質的基盤～、2016、308

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
熊谷　忠和（KUMAGAI, Tadakazu）
川崎医療福祉大学・医療福祉学部・教授
研究者番号：３０３４１６５５

(2)研究分担者
ティム・クレミンソン（CLEMINSON,Tim）
川崎医療福祉大学・医療福祉マネジメント学部・講師
研究者番号：２０４１２２６５

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）